田舍莊子

外篇

三之禮

特
遠 13
326
5

田舍莊子

外篇　全部　六卷

遠へ
門
帙326
巻5

田舍莊子序

莊子は世を
[illegible]
世の賢者其書を見て
[illegible]
聖經に異なるこゝろを
[illegible]
變しのそゝ獨
[illegible]

あ。おのれ。其書をよくんぶるべし。
さまごしその書、寄寓乃〳〵そ筆。
高遠つみぐ〻文字もとゝて。姿す姿だ。
短才つみ〻ぺ思ふ。
支那ふくこ。じんとゝさとゝ。
海ゝとゝ。幾ゝひ。色ゝす。林
希逸にしつゝ。もの也〻。其書ゝ解

ゝ。古髮城。けだるゝ。
小ゝ。ふゝ。大ゝ。
あゝ。ぬ〻。
いゝ。實ゝ。
異形ゝ。ゝ。
ゝし。希逸ゝ。
ゝ。ゝ。深意ゝ。

多く寓或は莊子義を供齋櫻山
其書或は見るべきなり妻子の為
我性を失ひて
笑ふべきものを
其情懷述田舍莊子
篇或は問ひ
久子
ものごとの心

櫻山莊子
櫻山
南華老仙
小
の
櫻山
久

編ノ内篇世に見るべきもの是
ゆゑに書林頻に是を梅山止
まず 我国ばかりにて内外学術を
ふるひ もの書を授く 惟 外篇
言釈に及ぶべしとの事なるべし
おもふに是を思ふ 思ふに涼く
稱 其自性 おのづから

梅山が意此書我田舍翁
のつくる所 苦心 苦しむも
なほ 屬もんこの通りのこゝろ
筆蹟 其首 [illegible]
うる辞 [illegible]
こゝ [illegible] 我 酒を
序 [illegible] 編 [illegible]

和一屋敷もそなはり、是よりの伴。
捨きものなれば、ふれよう、ふるまへ
敷、乃ち来りて、ふるまへ、

享保丁未秋八月得水書

渭南堂

田舍莊子外篇

目錄

蟻王蠻書
燕子清談
黃鸝入夢
鼃蛸儒釋
莊右衛門二客載許

書生懊惱
鶴爲明暗
鵠鶴論合
十王苟ち居但狀　狂言
閻王訴狀
如來真實法問

田舍莊子外篇卷之一

佚齋樗山述

蟻王蠻書

蟻どもゝ集りて英天より蚍の千叩びゝゝ紙
ゝ文のゝゝを内よりゝ紀蟻ぼぶゝさて云世界よ
生物多しといへども皆花ゝりゝを吉ゝ也ゝりて
面ゝに佛を求め休息の界もゝりゝ小樂いゝゝゝ
周果ゝゝ何をもゝゝゝもなゝゝ終日見ハ地よ
ゝりすゝを界微ゝゝゝ所ふたゝゝ佛とゝん分て

を已一人助かるとの事にて大勢仲間と
偽り王の汗となりて中々宮へ引こむと云
老婆ゝ沢蟹を掌て戒て曰汝化の生物と羨
ことなかれ如何命の義法如何乃桜ふぶき
さらしてらくそうして見ゆまとも我義法成
勤て見さるかなよ彼が心よいかと若労れある
中らんも知べからず決人も亦為り馬かる新沢
を宴墨よ身をけしゝ農夫を野よ出て

田畠をうるおいて所と労をもろこと甚しと人た
人ゝ為よ一点を心と労をもろすを玉改を
執て民を治ん者ハ世ハ高位よ居く人ゝ
敬ゝこと人ゝもあしの濁りをもて中
を毒と受るかよ人ゝたゝ小心法労をもる事
刺刀刃又をとるもも甚ゝ許由ゝいやゝ
是しを知し無じて生物それゝの所をうる
それくの立所て生それくよ労苦をもろ事

世間に常ゝ人と申すは世界に生れてハ
人とおもひ〳〵に労苦をなし我一人の世界にハ
万ず造化の命にまかせて所也人並に
つれて世一人温くとして何の労苦もなく
て居むとおもふハ大成私心他の生物を傍を
求めて是をたのむ羅に粘に生きて終に
性命を失ふ者おほし我幸に人に食らるべき
毒味もなし我が所の徴なりと知る故に生ながら
出されて叩くこゝを屍と捨ひて賞翫
もなく人咎むる事ハ〳〵さ蛾の飛死し
ふるふ〳〵と水に沈て外と死
こゝろ〳〵身に禍のあるを今日此幸とおもひ
楽むべし汝只私心と云ハすこの楽の事来
ハ命に成に私ん事紀時ハ来るに面うせく
情の尽るを知て止む若執着して心胸に
横ハり成と成ハ苦しきハ是病此初ハ

なり一切は私心妄想貪瞋の根より出る事
と知るべし仏教も又云貪嗔癡乃三毒八
一切煩悩の根しといふ祇は三毒の累り古人
蜂蟻は君臣の義あるとして称するものは同僚
むつまじく一合をもとめて集りて巣を食ひ
一穴に居く事ひとむこころ分かと貪ひ
途に奪ふ時は相撰して礼を失して辭を約
時は約束を乱すと祇は人として分とわら

して欲と過よし巧を用ひ人祇欲をこれが
為しのよ紀事ぐらりと工夫して人を害を
をを知り見て同僚相事ひ和恵し親族和
睦不義無礼して君に事の礼を知ざる
ものは微地の祇より私けんや天将に為ん
とする時は祇が神に事でて穴の口をぬぐ
ものは欲なるゆへ人を天に感ずるなし世
労をいとひて他をうらむ者は祇が性命を

そむくし　蟻王是を聞て大に感じ百官を
あつめ玉璽書出し　完の皇帝の璽こと書に
いはく
一人ありと雖ども紙にて要とも已ともるものハ
常に身を慎て人民を撫育して分を安むして
是事をたのしむ所を求めざるを心ばせ
たづうとあるを紙先づ重き物と軽ハ
ぶれハ和して怨ず人に乱と加へざれ人の

咎の成るる事 好く無の辱しめを受る事 世間人毛性と擾ハざれハ 言葉乃うちに心を生じ 欲もる心と成て せざれハ欲 癖よ郷て口と動 くところの毛むづかしき事 もたづに知 慮分かと費こともあり 世よ交りて心穏ら かる人道こ とのれと知ざ分若い人と知ば 常よ無と怪むこと多く 多の毛よ傷れる者 と忘遷て己よ劣る者と侮り弄に多のれが

もる不可と心て毛こして己よ同じき者 と知りとしおのれよ不同者と思くこれ好 で人毛性評もる者ハおのれが知とあるハこむ と称して人の善といひ減して人毛過と揚 この人のおもてもも揚もる事と忘むなら 常よ無きと先みて悪と毛性とたるひ 言葉の事よ成号して内輝たる事多し 情よ中ざる事あれハ蓋ひ人毛己よ従さること

あれば意分生涯人ととゞめくこゝろ肯分
ことなり
一已と知らざる者八世間おのゝ如者分と思
へり故に他人の善を賞
ことなり人に善を賞ても察知とまりて内
心私わるんかとさゝれ已が私心ある故に人の
善を伐ん已う私心と云て人と競ふ小人に
常し無人の況れる非と見出と云てゝ

かゝる私わりとしかくれどゝ者八凡人の恥む不
知て善人の親まざる所也禍不善に及べ
改る事と志ゝ天人ともに善と賞る者也
莊子言ことにつる陽に恵とる人也
罰し陰に恵とるものとバ天也と野ととと
いへり
一君子に服ら小人の行ひと見る事ハ嬰兒乃
親遊と見るごとし他の嬰兒に親遊と見て

咎め謗る者なんや人嬰兒と見れと爭ふ
者好〳〵心の信用ゝ〳〵さんかと少人の行とかんて
違つと恥む者ハ我も又少人の口真とおもひ彼と我
と心の信用ゝ〳〵さかれこんつゝ着て和合こと
のゝ但〳〵君子職よ高ひて惡人と罵もるハ
中むすと恨さるの設なり惡みく罵とはなるは
あるに孔子曰不仁と惡しこゝと高〳〵さハ紀こ
と行ふ人と惡むまし高〳〵さ恨い和て禍は

端と多れ怪ひへ〳〵

又小蟻ちと戒て云

世ハ人ハ地よ地よ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ハ天の幸し
流水ハ苦よ活し濁り水ハくさる生物ハ〳〵
動て用をなすと者こ動といふハ私ちる人
中年ハ今ハあの見聞ハ巧とくくも裏よ
惡ハ動うざる者ハ見世の巧なり故ゝ中年
以前ハ只古人の言と雖〳〵て私言ハ雖へど

法を守てうづ〳〵我が初と学ぶよりとなれ
古人と雖〳〵法を守りての上に道わる時は
補ふ〳〵もとゝうづ〳〵学ふもろ〳〵道は人情れ
無ひ者にて補ふ〳〵学問は只書を讀のみに
行ふ者と成り地に墨心を修行とゝ〳〵べ
〳〵法見る事〳〵中に就て成て成る
心〳〵試し善悪邪正を弁〳〵決して惑に
〳〵心法受用に種〳〵すべし善悪邪正

徒に見て無〳〵らして其おのまゝ無成
無〳〵に只時〳〵に為おのれと知〳〵見て我が心
此非と知て改めし人の非は見んやもこの
非は見邪〳〵人の非は見んやもこの
非と知る人成知〳〵に成

蕪子清詩

小雨ぐも集り蕪と揮して謂て曰沙は天涯の

客ふてはしの者よりそ物うを沙人家の
樽の巣を抜れとも人沙と親へむしもせび和て
板されてもうらなて沙こわる人巣成抜られ
脇して沙とうこよ事の沙人家よ盗ひられ
ものよもわるべ何の故と云てう人沙と重もうわ
夢ち云吾何の故しいふ事とも我ハやせうら
小ちと盗ひ出よ事く厚味もの故人我
と親して盗ひとおもふ人の歌と動

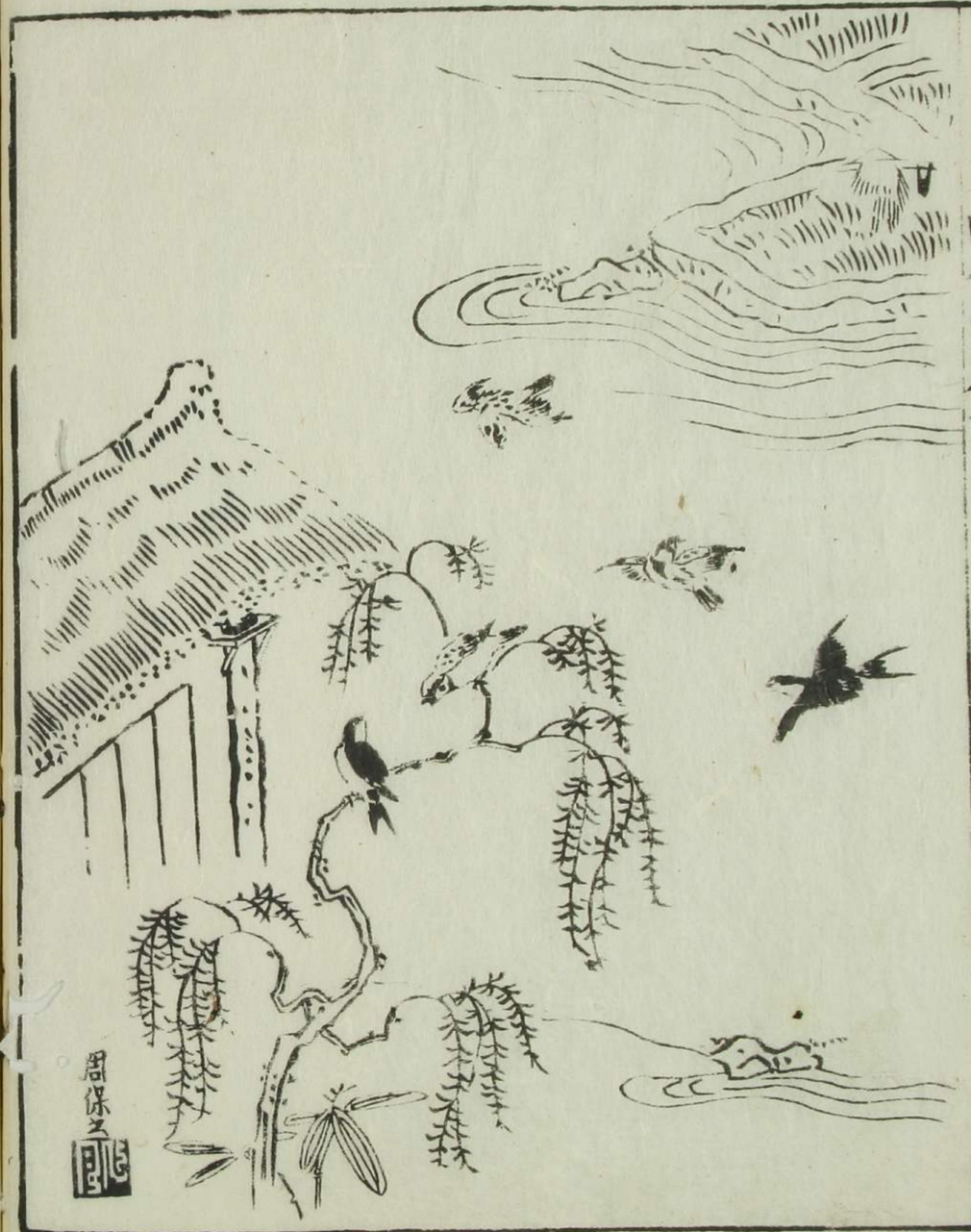
さく我ハ我が自殺の幸より我ハ人の恨をと
そこるべ人命よ害とるるぬこと餅ハお意れ
小虫と云て盗へ見して事出り出故人の
田畠とわさとぬもと食ひとを人ことふ
ヤもおらず蛇蜂のしく人と利しつるを
故人に無まれを人ち正直の者してこれが
ちやまようぬ者とバ為ちも沙くこれ
故人親所と食ふ事とるうち悪して人

のあるよ物をふやしとるとても一方にて害は
ふるとそれとをそれ一倍あるひハ人の情猫ハ
鼠を取人のためよりもかつて家をこわしハ
盜喰をもゆるして鼠をこらしめ
まてもまく畜生をもつ迫ハ少きてハ番
をぬすむ人の秘蔵もつる鶏鳥を盜ふ
ものハ犬ハ門をまもる也他の犬は

まもるをぬと主人をかして飼主どもを見も取よ
人をハ直ちに人ゆきて垣くゝ様とやうどうもせきさ
を引盜喰をして様くの害をなすをなよを不
あてハ面みて打殺して皮をとるも道理なら
人もまた殺りしかるハたゝ人なる働をもれ
ども作の不ものハ大きなる害をとる
あるよ人を面をむ少人の常として人に害を
まる事をバいとゞして人に害ふ働をこゝろ事

ぐらりとかぞへ銭を見かぞへ人のたのもし働きた
人銭と思ひとて脇と立ぱおのれとたらぬ
所に人ようおのれとたる時ハ人もにくまれ
ど禍ともなるぬるべし智ある者ハ銭よ
恵じてを智と用ひ人の働きをたるべし
おれが智よ智を自慢して人ハ非と見知て
人よりも幸を請人ハ脇をあして幸海の
嫉ともなるかゝ智都てとのれとそこなひ

人とそこなふ恵ある者ハ人ゝを命を知て
とのまゝ成なり濡りても人の害ゝなるんと
恐れ慎ひべしおのれが恵をたゝを人ゝ孤成
して相ゝ助りとなるかゝもるの幸留
遠てそこなハんとつさて身のひとけとなる
のゝ平竟欲ゝ起りておのれとこれ恵を
者ハ命ゝ選ひ恵ある者ハ恵ゝ選ゝ禍ハ銭ゝ
害とおてゝづゝ拙を恵ひりのゝ人の銭よ



猫もろよハ行ひ分を鍋ておのをと利ちむと
もろ時ハ三人の害ハ成ぬ物ハ沈ぬ
十羽て連立て地よこ飛まろ物と拾ひ金沢
山成出けるとて金ハ人も沈ぬ月とかけは
好商人の骨と行て拾りうあるひ忘と人の
新ざろ先よ黄弱もろ所よ人もろぬハ四
と作りて出ぬのうをかしをかをまて
ろもたうどハ猫をうを四ろ不四ろをを

忘れど大勢あるもの寄ハ一方より是ハ捉へて殺生
しる者をやらひあるとゝ法粘と云てつかふ
燒香と成のゝ人も又かくハ山法と有き
たるハ泄神より行べしとれと云こゝよ法と
杞を者とハ成ハ戸をゆしよ法とあるゝ蕎食
きて出家すゝ言はもるハ人の上此
しゝ忘れく法を守る者ハ多者はゝ多
是ハ事実のおゝしゝ少の他落より居れハ事海

なりとて為る色成ハ法を杞を者ハ修よ者此
禍と成利を求るハ人の情紀れもるく法先
と考て人此害よ為るゝ為て殺る
所と求るハ人も無まれず者此禍もるほど
とゝく人の害よ為る事とまれハ所の禍よ為る
と親会をゝ紀も口腹の欲あるハ人
おしまぬ小虫と云ハ人の為ゝと文
海を畠の虫を捨へ食ハ海此畠よ外と腔べ

黄鸝入夢

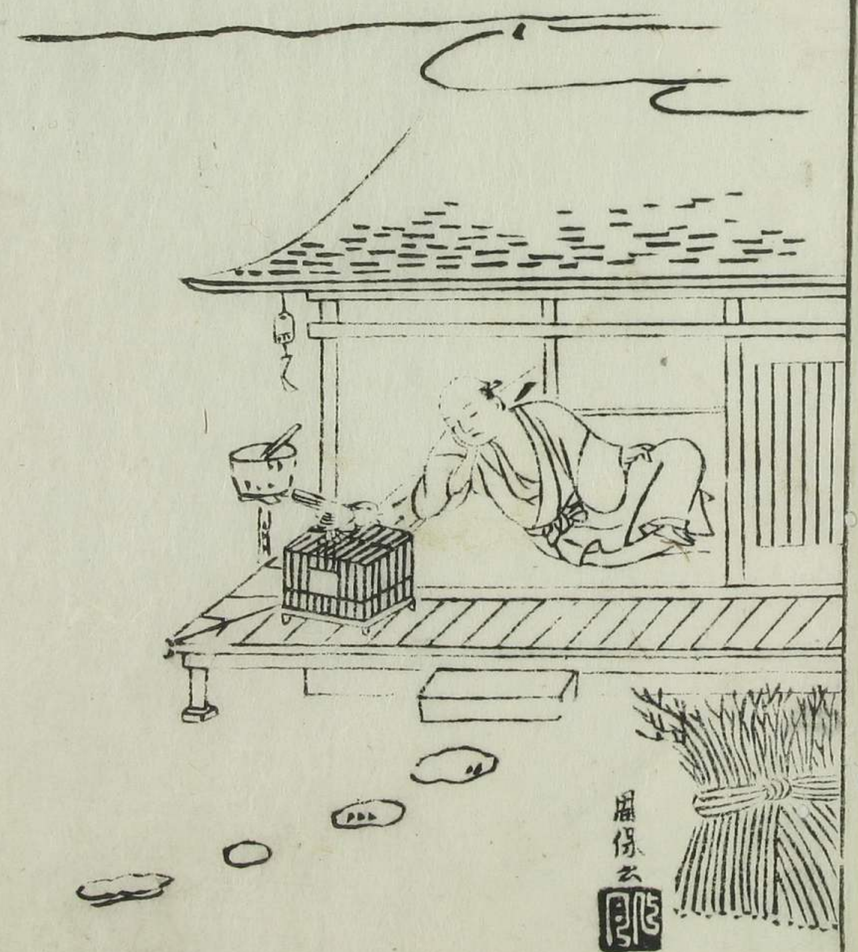
或人好て夢を友として謂て曰その方ハ
ほとゝぎすとく何者ハ鶯ひとし何とおもひ出て
の事ぞや亭を問て我夢ハ紙鳶ふすまの
れ中く極楽浄土ハ風色水色書に時りまて
色皆漠漠のこゝろといふべきハ法花経と勝り
かゝる極楽の作りをもんとおもひ毎日敬礼
して何を祈ぐさみよ何ハいつひこ友矣

て給りぬを夜彼堂参より見えて謂て云く
此間行事としのふとおもひて会ゆゑ
所よ堂の鳴とゆれば大き成る音聞ひと
先年我元極楽ゆくいふ成る人浄ゆんと
ありひ来給しろ事わり彼の西方極楽
浄土とつふハ阿弥陀仏の願ぶりて会仏の
往生もろ西元祖法然上人法花経とバ捨
閣抛とそ思りて会仏の行者ハもこそ

我そのふとたくばうくと捨て東門の梅の本にて鳴うぐいすバ経巻中論和して世間地獄より怪雷出て羅刹鬼と化しらくがごとくいのちを捨ひろうく無てこうもう我が法華経と鳴うい別に故おうは経文の内に正直捨方便と云事あり此一句を聞くさま他をかく鳴るこ何とう正直せいつ世間にて正直しいふをワがなすこう事とよ

ことあるこうとかくこうだう捨をたくばようちあけて云と正直者しいふをまだこうしてハ正直の義よりけいどこ心邪うう道を守て死よ及べうとおのまと曲こうなれ是と正しいふこうまかりよして偽らば道に捨て私に巧ばいふくこうれを是と直しいふこ正直ハ心の基こ此正直の基が立てば孝悌仁義も功くれ方善もこう湧出て人倫ひつまりく上下穏うく

りしが正直の基帝ゝ時ハたゝひ周ゝ孔子乃
ありとも是皆偽のこともよ初あれば人ゝよ害あり心の
たゆまるもれば彼のこゝろあるよハ大きゝ所ゝ人ゝ
よ立べのうしれ偽ハ天下れ禍し天地の造化も正直
乃道を以て行ふゝ春よ生ずるハ春の暖感乃よ
感じてすゝと暖ゝ冬ハ生ずるゝ冬に
生ずるハ夏の生ずるの気よ感じ〻枯ずる義乃
秋よ変のゝ物ハ秋氏冷気よ感じてかゝまり年



年かくれこゝ一ツして俗の事もなく深き
こゝもなく元禄の春とゝ冬をいつも
寒くして雪ふる日を暑くして雷鳴
山に生じる物いつも山たまして山に咲あり
水に生ずる物いつを水に生じて水に合ひり
今まで見る物はれ例なくゝゝる事也
今こゝ海に生じる物の例に山に生じ生れ
事をこゝ見道と寄て曲をすることいあず

やくしゝ人よりこゝ出りて俗ゝ深して
物とゝ生じる事物ゝ見直りて私ゝ見る
らじゝや禽獣草木ゝ生じる名分に無じて
元亨の一端い倫ゝ
ゝゝる事もゝ梅の実化に成て私に概を
生じる事物ゝ造化の命に深ひて形成
変ゝ成ゝ見る物ゝ毛ホハ非情の物と禽獣と
見ゝ成ゝ馬ハ性をあゝ俗て牛ハ

とをもる事なり。牛は牛の性をつくりてうまの形
ゆく事をうまのごとく猫は猫の類までもの
ものくさ性をわきまへてかくすこと能はず。
食を求め腹を満れば休む雄雌感ずれば交り
感ずれば交ることまた正直の一端なり。人は物の
霊なり天地万物の主なり。しかるに道理を曲げ
こころをもとして利をむさぼり私の巧をなす。
直かるべき道を背き理を忘れて偽をなす。

偽をしらざるを正直といふ。太古の人は
実にして教をまもりてかくのごとくなれば世
に事なく知恵ぶかし欲心のたのしみ極まれば
巧を設け偽りかくすをもって人にかく
もの事なれば世に私のおほき者なり。
人はかくすものなり。心は私なく身は不善の
行ひなければ天地神明も和らぎ給ふ。何ぞ
人は偽をすぐれる人や近所賢君にうとき

者とおいめて曰ゆ人ゆくを事行うや人
にうしてまゆ善事いうを此過し何ともに人う
かくを事れ此をうりうゆ弟とおへ武生渡人
ゆ渡をこうゆ是ゆ伝て此の事身をを
居ゆまをよび入眼日海ゆう表方ゆ新系
者も用あれいまうゆ気づいをれ渡ぐ事
ゆうのをまうかりをゆの拾うをもれ人う
をゆまもし何とう捨方伝ゆう侍のうをとば

虚言ゆいの軍中まをれうをとば謀ゆう云仏の
うをとば方伝ゆいふをの始うるまををを内
ゆ仏のうをは大義大悪のゆうり伝のをを
悪伽の流生成おゆうをうて解ゆ善ゆ
引入むゆあれ方伝ゆうこを少をを志ゆして
仏ゆ妄語をうをて何のゆけもるく偏ゆ
伝伝をれば伝ゆは大き成食遠ひゆをて害
ゆ成をおゆ抜おゆあれ法花ゆおめて

大家の機ある者ハ方便とハ捨て用ることなり
さ程いろまでを苦よりあつて毒よりあるぬハ正
直しとまりしのよ物よりあるぬ人と
仏の方便ハ天地一体正直のハ心より出るなり
方便し紙ろふ世人を正直ハ心とバ我ぐ人欲
乃泥よ堀墨方便のまゝ絵をしてうそとつき
てを人のためよりなどいひて学ぶ
て紙にて作ら人巧と用ハ物のまゝ誠なり

為ようと苦しうそとつきて人のため成と
いふを一方ハ有ふるまうそうまこ
ぐれも一方ハ又それなどの害なて板を立
仏の方便ハ世我を欲の一体煩悩の至情ろ
出れば巧を用ることを我よりあて一正
のきぐれうそれ減ぼよ人の害ふ
事を忘れて正直捨方便ハ法の之況や
世人の巧を用ハ正直の一体を離れて意識

のうちより出て私心を離れ初めてはじめて身も
禍もなのごとく正直ハかし用ハ無益を
おかく用ひ無益おかしこと正直のみて行き
まいらせ方便の偽巧ハ仏者別元人を
かし用ひ害あり大ハ用ハ大ハ害を
なし偽巧のおかく心正直なるぬ者とハ知れあり
てを人をあむ者と我い小者とかのようなるど
只正直捨方便の一向者ばかのこ